

県立高等学校教育課程課題研究（英語）

—「主体的に学習に取り組む態度」の評価に関する研究—

運営委員長

愛知県立尾北高等学校長

南谷 守（令和6年度）

運営副委員長

愛知県立安城高等学校教頭

井上 健二（令和6年度）

運営委員

高等学校教育課課長補佐

森本 芳裕（令和6年度）

高等学校教育課課長補佐

竹内 賢一（令和6年度）

高等学校教育課指導主事

武田 尚士（令和6年度）

総合教育センター研究指導主事

榊原 啓文（令和6年度）

総合教育センター研究指導主事

武田 邦生（令和6年度主務者）

研究員

愛知県立惟信高等学校教諭

久納 知幸（令和6年度）

愛知県立瀬戸北総合高等学校教諭

伊左治里帆（令和6年度）

愛知県立春日井東高等学校教諭

佐々木 誠（令和6年度）

愛知県立旭野高等学校教諭

木下 裕美（令和6年度）

愛知県立尾北高等学校教諭

栗木 裕子（令和6年度）

愛知県立岩倉総合高等学校教諭

藤本 貴之（令和6年度）

愛知県立丹羽高等学校教諭

村瀬 美樹（令和6年度）

愛知県立木曽川高等学校教諭

山下 明子（令和6年度）

愛知県立東海南高等学校教諭

深澤 晶（令和6年度）

愛知県立阿久比高等学校教諭

田中 恵美（令和6年度）

愛知県立岡崎北高等学校教諭

富田理恵子（令和6年度）

愛知県立岡崎西高等学校教諭

橋本 友紀（令和6年度）

愛知県立吉良高等学校教諭

宮川 孟（令和6年度）

愛知県立時習館高等学校教諭

清水 翼（令和6年度）

1 はじめに

平成30年告示の高等学校学習指導要領は、令和4年度の高校1年生から年次進行で実施されており、今年度から高校1年生から3年生までが新しい学習指導要領の基で学ぶ形となった。次年度以降も、小学校・中学校において新しい学習指導要領の基で学んだ経験がより多い生徒が高等学校に入学する。

学習指導要領では、全ての教科・科目等の目標及び内容を「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の育成を目指す資質・能力の三つの柱で表してある。学習評価に

においては「観点別学習状況の評価」と、これらを総括する「評定」について、学習指導要領に定める目標に準拠した評価として実施されている。

観点別評価のうち、「主体的に学習に取り組む態度」の評価の在り方については研究の余地があると考えられ、今回の研究テーマとした。妥当性と信頼性を確保した「主体的に学習に取り組む態度」の評価の在り方に焦点を当て、ワークシートやループブリックを基にした具体的で活用しやすい実践事例を紹介することとした。

2 研究の目的

「主体的に学習に取り組む態度」の評価を行うに当たり、妥当性と信頼性を確保するとともに、教員の負担感を軽減しながら効率的に評価するための手法を提案することが本研究の目的である。「主体的に学習に取り組む態度」の評価に関しては、単に継続的な行動や積極的な発言を行うなど、性格や行動面の傾向を評価するのではなく、生徒が自らの学習状況を把握し、学習を調整しながら学ぼうとしているかという意志的な側面を評価することが重要とされている。このことを踏まえ、研究員が自校で指導と評価の実践を行い、その成果を還元する。

3 研究の方法

「主体的に学習に取り組む態度」の評価の在り方について、四つの班に分かれ、それぞれが小テーマを設けて具体的な評価方法について研究を行い、実践報告を行う。

(1) 1班:「思考・判断・表現」と一体的に行う評価

『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料（高等学校 外国語）』には、「言語活動を行っている場面で「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」の評価を一体的に行うことができ」とある。これを基にして、具体的な評価実践を行った。

(2) 2班:振り返りシートを活用した評価

振り返りシートの記述や自己評価などが、実際に活動への取組に表れている様子を見取ることによって評価を行うことがあり得る。振り返り自体は評価ではなく指導であり、その振り返りが次への活動に生かされているかを見取ることが評価につながると考える。生徒自身が目標を立て、目標を達成したかどうかの振り返りを行い、そして次の実践につなげていく流れをつくる形で実践を行った。

(3) 3班:プロセスライティングによる評価

「書くこと」の評価について、ライティング活動を行う際に、複数の過程を通しながら途中経過を可視化することで、「自らの学びを調整しようとする側面」と「粘り強い取組を行おうとする側面」を見取る評価実践を行った。ただし、プロセスライティングによる評価を行うには、教員の負担が大きくなることが予想されるため、できる限り教員の負担に配慮した形で評価を行う方法について研究した。

(4) 4班:ノンバーバルスキルの評価

学習指導要領の「学びに向かう力、人間性等」には、「外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的、自律的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。」とある。ジェスチャー、アイコンタクト、声の大きさや抑揚などは、相手に自分の意図を伝えようとする配慮と捉え、「主体的に学習に取り組む態度」として評価する可能性を探った。

4 研究の内容

研究員の指導と評価の実践については以下のとおりである。

(1) 1班:「思考・判断・表現」と一体的に行う評価

単元の終わりに設定するパフォーマンステストを基に、「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」の評価を行った。その際、以下の三つの点を重要な要素として取り入れた。

ア SMARTな目標

Specific (具体的な)、Measurable (測定可能な)、Achievable (達成可能な)、Realistic (現実的な)、Time-bound (期限がある)の頭文字を取って、SMARTな目標を授業者が立てることを大切にする。

イ 目標の達成につながる指導と支援

パフォーマンステストを行う前にリハーサルや中間発表を行うことで、生徒自らが自分の足りないところや改善すべきことに気付く機会、つまり自己調整学習の場を設ける工夫を行う。

ウ 適切な評価

パフォーマンステストの結果のみでなく、パフォーマンステストを行っている生徒の姿から、単元の学習過程で学んだ様子を見取ることで、総括的に評価する。

3校で行った実践事例を基に考察した結果、「主体的に学習に取り組む態度」を「思考・判断・表現」と一体的に評価する場合、同評価となることが多いことが分かった。しかし、注意すべき点として、生徒が自らの学習状況を把握し、よりよく学ぼうと粘り強く取り組んでいる様子が見取れるのであれば、「主体的に学習に取り組む態度」の評価が「思考・判断・表現」の評価を上回ることも可能である。

(2) 2班:振り返りシートを活用した評価

振り返りシートから「主体的に学習に取り組む態度」を評価する上での実践を3校で行った。振り返りを行うことで、生徒自身の学習の調整の手助けとなるとともに、授業者が次の授業で取り組むべき課題を発見できた。また、生徒自身が目標を設定し、スモールステップで目標を達成することにより、生徒が成長の実感を味わい、次のステップへのモチベーションを上げることができた。さらに、最終評価だけでなく中間評価など、定期的に自己評価をすることで学習状況を確認できる工夫を行った。これにより、生徒自身で「振り返り」と「改善」のサイクルを繰り返しながら、英語力の向上を図ることができた。

(3) 3班:プロセスライティングによる評価

生徒が作成した **First Writing** について、ペアで相互評価を行い、それを基に推敲をして **Second Writing** を作成する指導を行った。相互評価を行うことで生徒は改善点に気づき、それを **First Writing** から **Second Writing** に反映させ、よりよい作品とすることで、「自らの学びを調整しようとする側面」と「粘り強い取組を行おうとする側面」を見取ることができた。

工夫したこととして、**Second Writing** を作成する際に、生徒が具体的に改善点を記述するシートを作成した。生徒が何行目のどの部分が改善点であるかを明記することで、教員は改善点のみを見ながら評価をすることができた。また、できるだけ「分かりやすく、具体的に」ループリックを作成することで、効率的に評価を行うこともできた。

(4) 4班:ノンバーバルスキルの評価

以下の二つの方法により実践を行った。

ア パフォーマンステストに向けた「自らの学びを調整しようとする側面」と「粘り強い取組を行おうとする側面」の二つの側面による評価

ディベートによるパフォーマンステストに向けてのルーブリックを事前提示した後、ノンバーバルスキルの達成目標を生徒自身が設定する活動を行った。適切なアイコンタクトや抑揚などを練習しながら、グループ活動での相互評価や中間自己評価を通して改善点を見つけるなどの取組が見られた。

イ 「聞き手への配慮」「主体的、自律的に外国語を用いる」ことによる評価

ノンバーバルスキルを活用することは、相手に何とか伝えようとする気持ちの表れである。言い換えれば、聞き手に配慮しながらコミュニケーションを図ろうとしていることになると考えた。上記アのように学習過程は評価せず、パフォーマンステストでのみノンバーバルスキルを「主体的に学習に取り組む態度」で評価した。ルーブリックを工夫することで適切に生徒の様子を見取り評価することができた。

5 研究のまとめと今後の課題

研究員による指導と評価の実践及び研究協議を基に、「主体的に学習に取り組む態度」の具体的な評価方法を提案した。この研究成果を踏まえ、より妥当性と信頼性を確保した「主体的に学習に取り組む態度」の評価の在り方について更に研究が進むことを期待する。